

—原 著—

一般臨床歯科医の歯内療法に対する
関心度の統計学的研究

(県内2主要都市における調査)

小林 幸男* 山田 みちこ*

高塚 真理子* 田辺 秀也**

*新潟大学歯学部歯科保存学第2教室(主任 小林幸男教授)

**新潟県厚生連, 刈羽郡総合病院歯科

(昭和50年3月31日受付)

A Statistical Study of Endodontic Treatment in General Clinical Dentists

Sachio KOBAYASHI, Michiko YAMADA and Mariko TAKATSUKA

2nd Department of Conservative Dentistry, Niigata University School of Dentistry
(Director: Prof. Sachio Kobayashi)

Shuhya TANABE

Kohseiren Kariwa-Gun General Hospital Dental Clinic

I. 緒 言

近年、歯科の基礎、臨床のいずれの分野に於いても進歩発達は著しく、目立つものがある。

歯内療法分野に於いては、補綴の設計、技術の向上と相まって、その必要性が強く叫ばれ、着実な考え方と、正しい技術が特に要望されるようになったのは、未だ10年を出ていない。

それに伴い、臨床に於いては、診療室内の器具、器械、設備等の進歩改善もみられるようになった。

今回、著者等は、一般臨床歯科医に於いて、歯内療法に対して、いったいどの位の関心を持っているのか、又、実際にどの程度の治療を行なっているのか、治療器具、器械の設備の程度はどの位であるのかを知りたいため、当新潟地区の2主要

都市に於いて、アンケートにより調査を行なった。その結果、2, 3の興味ある知見を得たので報告する。

II. 研究材料と方法

1. 材 料

昭和48年3月17日、長岡市歯科医師会学術講演会に於ける参加者44名。

昭和48年10月27日、新潟県、及び新潟市歯科医師会共催学術講演会参加者71名。

合計115名である。

2. 方 法

参加者115名に対し表1のアンケート用紙を配布し、無記名にて記入を依頼し、当日回答を回収した。

得られた回答から、調査項目を下記の通り5つ

表 1

アンケート (無記名にて御記入下さい)	
年齢	_____, 開業(勤務)年数 _____, 卒業年度 _____。
(1)	採算上不利な歯内療法に対する興味は? ほどほど, あまりやりたくない, しっかりやりたい。
(2)	仮封をすると痛みが出て困り, 治療が進行しないことがありますか? 有, 無。
(3)	リーマー (又はファイル) での根管拡大は? あまりやっていない。 時間不足で忙しくてできない。 和製リーマー No. 3位までやる。 十分に (号位まで) 行なう。
(4)	愛用し (手許において) ているリーマーの番号は? 和製 1~6号, 7~12号 舶来 Kerr 1, 2, 3, 4号, それ以上のもの。 M.M.社 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, それ以上も。
(5)	根管の化学的洗滌を併用していますか? 殆んどしない。 行っている。
(6)	消毒用 (根治の場合) 薬剤は何を愛用していますか? FC, CP, C, PTC, その他, ペリオドン。
(7)	注抜はどの範囲の歯に行っていますか? 前歯のみ, 小臼歯まで, 大臼歯まで, 自由診療のときだけ, あまり好まない。
(8)	自分の一番慣れていて, 使いよい根充剤は? カルビタール, N ₂ , トリオジンクパスタ, クリワソ, AH 26, ガッタパーチャー (十キヤナルス), シルバーポイント, その他。
(9)	次の器械や装置の中, 使っておられるものは? 根管長測定器 (root canal meter), ソノ・エクスプローラー (Sono-Explorer), 歯髓の電気診断器, イオン導入装置, 細菌培養セット。
(10)	御自分の治療 (特に根治) の予後の目標を, 何年位を考慮してやっておられますか? 2年, 3年, 4年, 5~10年, 10年以上。

に分類した。即ち,

- (1) 歯内療法に対する関心度について
——質問 1

- (2) 設備の状態について

——質問 4, 9

- (3) 実際に行なっている根管治療内容について
——質問 3, 5, 6, 7, 8

- (4) 仮封後の疼痛発生に伴う治療の遅滞について
——質問 2

- (5) 根管治療の予後に対する術者の目標について
——質問 10

さらに, 上記の各項目について, 臨床経験年数を4群に分類し, 又, 歯内療法に対する関心度についてはA, B 2群に分類して, 考察した。

III. 成 績

- (1) 歯内療法に対する関心度について

質問 1. 採算上不利な歯内療法に対する興味は?

表 2-1 臨床経験年数と歯内療法に対する関心度 (質問 1)

経験年数	関心度	A (人数)	B (人数)
0 ~ 10		30 65.2%	16 34.8%
11 ~ 20		18 78.3%	5 21.7%
21 ~ 30		18 62.1%	11 37.9%
31 ~		11 64.7%	6 35.3%
合 計		77 67.0%	38 33.0%

A: 根管治療をしっかりやりたい group

B: 根管治療をあまりやりたくない group

根管治療をしっかりやりたいと回答した group (以下 A group とする) は, 全体の67.0%, 根管治療をあまりやりたくない, 及びほどほどにと回答した group (以下 B group とする) は, 全体の33.0%であった。

根管治療に対する関心については, 臨床経験年数を0~10年, 11年~20年, 21年~30年, 31年以上の4群に分類して, χ^2 検定を行なった結果, 経

験年数による A group と B group との間に差がなかった。すなわち、経験年数が増加するにつれて、しっかりやりたい率が高くなるとか、逆に、低下する傾向は全くなかった。(表2-1)

(2) 設備の状態について

質問4. 愛用している reamer の番号は?

和製の reamer のみを愛用している 歯科医は全体の40.0%, 舶来の reamer を愛用している 歯科医は59.1%, 無回答者は0.9%であった。

愛用している reamer については、経験年数が増加するに従って、和製のみを愛用する率が増加していくとか、減少していくとかの傾向は、全くみられなかった。

舶来の reamer 愛用者についても同様の結果が認められた。(表3-1)

関心度別では、舶来の reamer を愛用している者は、A group では66.2%, B group では44.7%で、危険率5%以下で有意差があった。

和製の reamer のみを愛用している者については、A group では33.8%, B group では、52.6%で、こちらも危険率5%以下で有意差があった。(表3-2)

質問9. 次の器械や装置の中、使っておられるものは?

各種器械のうち、歯髓の電気診断器を使用している 歯科医が全体の66.1%で、次いで、根管長測定器39.1%, イオン導入器30.4%の順であった。

表 3-1 臨床経験年数と reamer の種類 (質問 4)

reamer 種類 経験年数	a (人数)	b (人数)	c (人数)
0 ~ 10	16 34.8%	30 65.2%	0 0%
11 ~ 20	9 39.1%	13 56.5%	1 4.3%
21 ~ 30	12 41.4%	17 58.6%	0 0%
31 ~	9 52.9%	8 47.1%	0 0%
合 計	46 40.0%	68 59.1%	1 0.9%

a : 和製のみを持つもの

b : 舶来を持っているもの (和製+舶来, 舶来のみ)

c : 無回答

表 3-2 歯内療法に対する関心度と reamer の種類 (質問 4)

reamer 種類 関心度	a (人数)	b (人数)	c (人数)
A	26 33.8%	51 66.2%	0 0%
B	20 52.6%	17 44.7%	1 2.6%
合 計	46 40.0%	68 59.1%	1 0.9%

a ~ c : 表 3-1 参照

表 4-1 臨床経験年数と治療器械の種類 (質問 9)

治療器械 経験年数	group 人数	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)	e (人数)	f (人数)	総 計 (人数)
0 ~ 10	46	22 47.8%	2 4.3%	35 76.1%	20 43.5%	7 15.2%	6 13.0%	92
11 ~ 20	23	8 34.8%	3 10.3%	16 69.6%	7 30.4%	2 8.7%	5 21.7%	41
21 ~ 30	29	10 34.5%	1 3.4%	16 55.2%	6 20.7%	3 10.3%	4 13.8%	40
31 ~	17	5 29.6%	0 0%	9 52.9%	2 11.8%	1 5.9%	5 29.4%	22
合 計	115	45 39.1%	6 5.2%	76 66.1%	35 30.4%	13 11.3%	20 17.4%	195

a : 根管長測定器 b : ソノ・エキスプローラー c : 歯髓の電気診断器
d : イオン導入器 e : 細菌培養セット f : その他

表 4-2 歯内療法に対する関心度と治療器械の種類 (質問 9)

治療器械 関心度	group 人数	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)	e (人数)	f (人数)	総計 (人数)
A	77	34 44.2%	5 6.5%	54 70.1%	28 36.4%	11 14.3%	11 14.3%	143
B	38	11 28.9%	1 2.6%	22 57.9%	7 18.4%	2 5.3%	9 23.7%	52
合計	115	45 39.1%	6 5.2%	76 66.1%	35 30.4%	13 11.3%	20 17.4%	195

a~f: 表 4-1 参照

又、歯髓の電気診断器と根管長測定器については、経験年数が増加していくに従い、使用している歯科医の率が増加していくとか、減少していくとかの傾向はみられなかった。(表 4-1)

関心度別では、歯髓の電気診断器と根管長測定器については、A group と B group との間に有意差は全くなかった。(表 4-2)

(3) 実際に行なっている根管治療内容について
質問 3. reamer(又は file) での根管拡大は?

根管拡大の程度については、十分に 4 号以上拡大を行なっていると回答した歯科医が、全体の 62.6%であった。

根管の拡大程度別にみた場合、経験年数の増加に伴い、十分に 4 号以上拡大を行なっている率が増加していくとか、減少していくとかの傾向は全くなかった。和製 reamer 3 号位まで行なっている者についても同様の結果であった。(表 5-1)

関心度別では、和製 reamer 3 号位まで拡大を行なっている者、即ち、あまり充分には拡大を行なっていない者については、差はみられなかった。しかし、十分に 4 号以上拡大を行なっている者に関しては、A group は 74.0%、B group は 39.5%で、5%以下の危険率で差が認められた。

(表 5-2)

質問 5. 根管の化学的洗滌を併用していますか?

根管の化学的洗滌を併用しているかどうかということについては、殆んどしないと回答した歯科医が 12.7%、行なっていると回答した者が 86.1%であった。

化学的洗滌を行なっている者については、経験

表 5-1 臨床経験年数と根管拡大の程度 (質問 3)

根管拡大程度 経験年数	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)
0 ~ 10	4 8.7%	8 17.4%	32 69.6%	2 4.3%
11 ~ 20	3 13.0%	5 21.7%	14 60.9%	1 4.3%
21 ~ 30	1 3.4%	9 31.0%	18 62.1%	1 3.4%
31 ~	1 5.9%	8 47.1%	8 47.1%	0 0%
合計	9 7.8%	30 26.1%	72 62.6%	4 3.5%

a: あまりやっていない人+時間不足で忙しくて出来ない人

b: 和製リーマー No. 3 ぐらいまで行なう人

c: 十分に 4 号以上拡大を行なう人

d: 無回答

表 5-2 歯内療法に対する関心度と根管拡大の程度 (質問 3)

根管拡大程度 関心度	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)
A	2 2.6%	16 20.8%	57 74.0%	2 2.6%
B	7 18.4%	14 36.8%	15 39.5%	2 5.3%
合計	9 7.8%	30 26.1%	72 62.6%	4 3.5%

a~d: 表 5-1 参照

年数が増加するにつれて、その割合が増加していくとか、減少していくとかの傾向は全くみられなかった。化学的洗滌を殆んどしない者について

表 6—1 臨床経験年数と化学的洗滌の有無 (質問 5)

化学的洗滌 経験年数	a (人数)	b (人数)	c (人数)
0 ~ 10	6 13.0%	40 87.0%	0 0 %
11 ~ 20	4 17.4%	19 82.6%	0 0 %
21 ~ 30	4 13.8%	25 86.2%	0 0 %
31 ~	0 0 %	15 88.2%	2 11.8%
合 計	14 12.2%	99 86.1%	2 1.7%

a : 殆んど根管の洗滌を行っていない者
b : 根管の化学的洗滌を行なっている者
c : 無回答

表 6—2 歯内療法に対する関心度と化学的洗滌の有無 (質問 5)

化学的洗滌 関心度	a (人数)	b (人数)	c (人数)
A	4 5.2%	72 93.1%	1 1.3%
B	10 26.3%	27 71.1%	1 2.6%
合 計	14 12.2%	99 86.1%	2 1.7%

a ~ c : 表 6—1 参照

で有意差が認められた。根管の化学的洗滌を行なっている者に関しても, A group 93.1%と, B group 71.1%との間に危険率5%以下で有意差があった。(表6—2)

質問6. 消毒用(根治の場合)薬剤は何を愛用していますか?

消毒用薬剤については, FCの使用が87.8%で圧倒的に多く, 次いで, ペリオドン40.9%, CP30.4%, その他の順であった。(表7—1, 7—2)

も, 全く同様のことが言えた。(表6—1)

関心度別では, 根管の化学的洗滌を殆んど行っていない者については, A group 5.2%, B group 26.3%で, 両者の間には危険率5%以下

表 7—1 臨床経験年数と消毒用薬剤 (質問 6)

薬剤 経験年数	group 人数	FC (人数)	CP (人数)	C (人数)	PTC (人数)	その他 (人数)	ペリオドン (人数)	総計 (人数)
0 ~ 10	46	40 87.0%	15 32.6%	2 4.3%	0 0 %	9 19.6%	15 32.6%	81
11 ~ 20	23	21 91.3%	7 30.4%	2 8.7%	2 8.7%	1 4.3%	9 39.1%	42
21 ~ 30	29	27 93.1%	9 31.0%	1 3.4%	1 3.4%	3 10.3%	14 48.3%	55
31 ~	17	13 76.5%	4 23.5%	1 5.9%	1 5.9%	2 11.8%	9 52.9%	30
合 計	115	101 87.8%	35 30.4%	6 5.2%	4 3.5%	15 13.0%	47 40.9%	208

表 7—2 歯内療法に対する関心度と消毒用薬剤 (質問 6)

薬剤 関心度	group 人数	FC (人数)	CP (人数)	C (人数)	PTC (人数)	その他 (人数)	ペリオドン (人数)	総計 (人数)
A	77	69 89.6%	28 36.4%	0 0 %	3 3.9%	8 10.4%	32 41.6%	140
B	38	32 84.2%	7 18.4%	6 15.8%	1 2.6%	7 18.4%	15 39.5%	68
合 計	115	101 87.8%	35 37.4%	6 5.2%	4 3.5%	15 13.4%	47 40.9%	208

質問7. 注抜は、どの範囲の歯に行なっていますか？

注抜の範囲については、注抜を行なっていると回答した歯科医が93.0%，あまり好まないと回答した者が7.0%で、圧倒的に注抜を行なっている者の方が多い。

前歯のみ、及び小臼歯まで注抜を行なっている者と、大臼歯まで注抜を行なっている者については、経験年数の増加に伴い、注抜を行なっている率が増加していくとか、減少していくとかの傾向は、全くなかった。(表8-1)

関心度別については、前歯のみ、及び小臼歯まで注抜を行なっている者に関しては、A group と B group との間の有意差は、全くなかった。大臼歯までの注抜を行なう者については、A group 50.0%と、B group 31.6%との間に、危険率がほぼ5%で有意差がみられた。(表8-2)

質問8. 自分の一番慣れていて、使いよい根充剤は？

根充剤の使用傾向に関しては、gutta percha point が52.2%，カルビタール44.3%で、この2種類が圧倒的に多かった。

gutta percha point の経験年数による使用傾向については、経験年数0～30年までの合計group と31年以上のgroup に分けてみた場合、前者が後者を上まわっており、危険率5%以下で有意差がみとめられた。(表9-1)

関心度別における gutta percha point の使用

表 8-1 臨床経験年数と注抜の範囲 (質問7)

注抜範囲	a	b	c	d
経験年数	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)
0 ~ 10	20 43.5%	24 52.2%	0 0%	2 4.3%
11 ~ 20	12 52.2%	10 43.5%	0 0%	1 4.3%
21 ~ 30	14 48.3%	9 31.0%	3 10.3%	3 10.3%
31 ~	7 41.2%	8 47.1%	0 0%	2 11.8%
合計	53 46.1%	51 44.3%	3 2.6%	8 7.0%

a: 前歯小臼歯まで注抜を行なう者
b: 大臼歯まで注抜を行なう者
c: 自由診療の時だけ注抜を行なう者
d: 注抜をあまり好まないもの

表 8-2 歯内療法に対する関心度と注抜の範囲 (質問7)

注抜の範囲	a	b	c	d
関心度	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)
A	34 44.2%	39 50.0%	2 2.6%	2 2.6%
B	19 50.0%	12 31.6%	1 2.6%	6 15.8%
合計	53 46.1%	51 44.3%	3 2.6%	8 7.0%

a~d: 表8-1参照

表 9-1 臨床経験年数と根充剤の種類 (質問8)

根充剤	group	カルビタール	N ₂	クリワン	トリオジンク	ガッタパーチャ	シルバー	キャナル	AH26	その他	総計
経験年数	人数	(人数)	(人数)	(人数)	パスタ	ポイント	ポイント	(単味)	(人数)	(人数)	(人数)
		(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)	(人数)
0 ~ 10	46	16 34.8%	10 21.7%	2 4.3%	7 15.2%	26 56.5%	2 4.3%	4 8.7%	0 0%	2 4.3%	69
11 ~ 20	23	12 52.2%	6 23.1%	4 17.4%	8 34.8%	14 60.9%	1 4.3%	1 4.3%	0 0%	0 0%	46
21 ~ 30	29	13 44.8%	7 24.1%	5 17.2%	13 44.8%	15 51.7%	0 0%	1 3.4%	0 0%	1 3.4%	55
31 ~	17	10 58.9%	7 41.2%	1 5.9%	4 23.5%	5 29.4%	0 0%	1 5.9%	1 5.9%	0 0%	29
合計	115	51 44.3%	30 26.1%	12 10.4%	32 27.8%	60 52.2%	3 2.6%	7 6.1%	1 0.9%	3 2.6%	199

表 9-2 歯内療法に対する関心度と根充剤の種類 (質問 8)

関心度	根充剤 group 人数	カルビ タール (人数)	N ₂ (人数)	クリワン (人数)	トリオ ジック パスタ (人数)	ガ ッ タ パーチャ ポイント (人数)	シルバー ポイント (人数)	キャナ ス (単味) (人数)	AH26 (人数)	その他 (人数)	総 計 (人数)
A	77	29 37.7%	18 23.4%	10 13.4%	18 23.4%	49 63.6%	3 3.9%	6 7.8%	0 0%	2 2.6%	135
B	38	22 57.9%	12 31.6%	2 5.3%	14 36.8%	11 28.9%	0 0%	1 2.6%	1 2.6%	1 2.6%	64
合 計	115	51 44.3%	30 26.1%	12 10.4%	32 27.8%	60 52.2%	3 2.6%	7 6.1%	1 0.9%	3 2.6%	199

傾向は、A groupの方が、B groupよりも多く、危険率5%以下で有意差があった。カルビタールの使用傾向については、B groupの方が、A groupよりも多く使用する傾向が、危険率5%以下で認められた。(表9-2)

表 10-1 臨床経験年数と仮封後の疼痛発生 (質問 2)

疼痛発生	a (人数)	b (人数)	c (人数)
経験年数			
0 ~ 10	28 60.9%	17 37.0%	1 2.2%
11 ~ 20	16 69.6%	7 30.4%	0 0%
21 ~ 30	20 69.0%	9 31.0%	0 0%
31 ~	7 41.2%	10 58.8%	0 0%
合 計	71 61.7%	43 37.4%	1 0.9%

a : 有
b : 無
c : 無回答

表 10-2 歯内療法に対する関心度と仮封後の疼痛発生 (質問 2)

疼痛発生	a (人数)	b (人数)	c (人数)
関心度			
A	48 62.3%	29 37.7%	0 0%
B	23 60.5%	14 36.8%	1 2.6%
合 計	71 61.7%	43 37.4%	1 0.9%

a ~ c : 表10-1 参照

(4) 仮封後の疼痛発生に伴う治療の遅滞について

質問2. 仮封すると痛みが出て困まり、治療が進行しないことがありますか?

仮封後の疼痛発生による治療の遅滞があるかどうかに関して、有りについては、経験年数0~30年までの合計 group が31年以上の group を上まわっているということが、危険率5%以下でみとめられた。無しについては、後者の group が前者の group より上まわっていることが、同様にみとめられた。換言すると、31年以上の経験者は、仮封後の疼痛発生に基づく治療の遅滞の起こることが、はるかに少ないと言える。(表10-1)

関心度別については、前述の有りの者も、無しの者も、A group と、B group との間には、全く有意差がなかった。(表10-2)

(5) 根管治療の予後に対する術者の目標は

質問10. 御自分の治療(特に根管治療)の予後の目標を、何年位を考えてやっておられますか?

根管治療の予後に対する術者の目標については、5年未満が13.0%、5~10年が44.3%、10年以上が27.0%、不明のものが15.7%であり、5~10年を予後の目標としているものが多かった。

5~10年と10年以上を目標としている歯科医の経験年数の増加に伴う割合の変化はみられず、ほぼ一定であった。(表11-1)

関心度別については、全ての予後の目標年数間に於いて、A group と B group との間には、全く有意差はなかった。(表11-2)

経験年数の多少と、関心度の高低のいずれにも

表 11-1 臨床経験年数と予後の目標
(質問10)

予後の目標 経験年数	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)
0 ~ 10	10 21.7%	19 41.3%	9 19.6%	8 17.4%
11 ~ 20	2 8.7%	13 56.5%	7 30.4%	1 4.3%
20 ~ 30	1 3.4%	13 44.8%	10 34.5%	5 3.4%
30 ~	2 11.8%	6 35.3%	5 29.4%	4 23.5%
合 計	15 13.0%	51 44.3%	31 27.0%	18 15.7%

a: 5年未満
b: 5年以上10年未満
c: 10年以上
d: 不明

表 11-2 歯内療法に対する関心度と
予後の目標 (質問10)

予後の目標 関心度	a (人数)	b (人数)	c (人数)	d (人数)
A	10 13.0%	33 42.9%	23 29.9%	11 14.3%
B	5 13.2%	18 47.4%	8 21.1%	7 18.4%
合 計	15 13.0%	51 44.3%	31 27.0%	18 15.7%

a~d: 表11-1 参照

無関係に、5~10年を予後の目標においている者が多いということが、表11-1と表11-2から判明した。

以上の統計学的有意性の検定はすべて χ^2 検定で行なった。

IV. 考 察

本研究に関連した文献又は、それに近いものは見当らなかつた。従って直接関係はないが、一般臨床歯科医によるとと思われる簡略な方法によって行なわれた歯髄ならびに根管処置の予後についての報告が、永沢等¹⁾、加藤(伊)等²⁾、早瀬等³⁾、山内等⁴⁾、加藤(浩)等⁵⁾によってなされている。黒川⁶⁾によれば、開業医としての歯内療法に対す

る考え方と方法の実際が、具体的に述べられている。

今回著者等は、一般臨床歯科医について歯内療法に対するアンケート調査を行ない、その結果を整理して、一般臨床歯科医がどの程度の歯内療法に対する関心を持ち、実際にどの程度の治療を行ない、治療器具、設備を整えているのかをある程度うかがい知ることができたと思われる。

アンケートに関する信頼性については、県下2主要都市である新潟及び長岡市のみを対象としたことを考えると、2都市の一般臨床歯科医数が236名であり、我々の対象人数は約半数の115名であった。しかも、学術講演会の出席者は特に歯内療法に興味あるいは、関心を示す人達である。従って、出席しない歯科医数を考えた時、アンケートの信頼性は多分に低下するものと言わざるを得ない。しかし、一方では、無記名による記入方式をとったため、調査結果の信頼性は一応の高さまで得られたものと考えられる。

調査の結果によると、臨床経験年数別にみた場合、歯内療法に対する関心度、設備の状態、実際に行なっている治療内容、及び予後の目標の各項目について、 χ^2 検定を行なった結果、経験年数の増加に伴う有意差は全く認められなかつた。

経験年数の0~30年と31年以上との2大別において、gutta percha pointの使用傾向をみると、前者が後者を上まわっていることがわかつた。

仮封後の疼痛発生については、0~30年と、31年以上との2大別では、経験年数の長い後者の方が、歯根膜炎を併発する傾向が少ない。

関心度別については、設備の状態、仮封後の歯根膜炎の併発、及び予後の目標について、AのgroupとBのgroupとの間には何らの差も認められなかつた。

有意差のあつた項目は、実際に行なっている治療内容、即ち、質問5、7、8のみであつた。換言すると、十分に拡大を行なっている者、化学的洗滌を行なっている者、大白歯まで注抜を行なっている者、gutta percha pointによる根充を行なっている者が、圧倒的にAのgroupの方に多

かった。又、カルビタールによる根充については、Bのgroupに圧倒的に多いという意外な結果を示した。

又、設備の状態については、臨床経験年数別についても、関心度別についても、何ら有意差は認められない。

予後の目標については、経験年数の多少と、関心度の高低のいずれにも無関係に、予後の目標を5～10年においでいる者が多いということが判明した。このことは、いろいろに解釈されるかもしれないが、予後の目標といっても、临床上の自覚症状の再発の有無のみに主眼をおいでいるものと解釈すれば、この5～10年というのは、一応妥当のところかもしれない。しかし、X線検査でみた場合、悪化している場合でも、自覚症状が発現しないことが相当多いことを考慮しておくべきであろう。

V. 結 論

県下2主要都市に於ける一般臨床歯科医115名について、アンケートにより歯内療法に対する関心の持ち方と、実際に行なっている治療程度、及び治療器具の設備の状態について調査を行ない、次のような結果を得た。

(1) 経験年数別と関心度の程度に2大別して、各項目にわたって統計学的処理を行ない、大体の傾向をうかがい知ることができた。すなわち、

(2) 臨床経験年数の多少にかかわらず、歯内療法に対する関心、設備の状態、実際に行なっている治療内容も殆んど差は認められなかった。しかし、

(3) 関心度別にみた場合には、実際の治療内容において明らかに差が認められた。

(4) 予後の目標については、経験年数の多少と、関心度の高低のいずれにも無関係に、予後の目標を5～10年においでいる者が多いということが判明した。

今回は、新潟、長岡という地方中都市での調査であるため、他の大都市や、あるいは、地方小都市では別の成績が得られるものとも考えられる。

VI. 謝 辞

本研究を終了するにあたり、種々、御助言を賜わった本学予防歯科学教室の堀井欣一教授に深く感謝いたします。又、アンケートをとるために、特別の便宜、御協力を与えられた、新潟県歯科医師会、新潟市歯科医師会、及び長岡市歯科医師会の役員各位に謝意を表します。

文 献

- 1) 永沢恒, 他: 歯髓ならびに根管処置の予後について. 日本保存歯科学雑誌, 10: 91-99, 1967.
- 2) 加藤伊八, 他: 簡略な方法による歯髓ならびに根管処置の予後について. 日本保存歯科学雑誌, 12: 101-107, 1967.
- 3) 早瀬一夫, 他: 神奈川歯科大学外来患者の歯髓ならびに根管処置の実態について. 日本保存歯科学雑誌, 14: 228-229, 1972.
- 4) 山内晴夫, 他: 歯髓および根管処置の予後について. 日本歯科保存学雑誌, 17: 174-179, 1974.
- 5) 加藤浩三, 他: 歯髓ならびに根管処置の予後について. 日本歯科保存学雑誌, 17: 143-149, 1974.
- 6) 黒川正平: 開業医と根管処置. 日本歯科医師会雑誌, 24: 243-251, 1971.